

唐津焼と古唐津

分野 文化

地域 全域

◎地図・写真・統計資料など

■名称と起源

唐津焼という名称は、唐津港から積み出されたことに由来するとされます。唐津から海路で消費地へ届けられ、自然に唐津焼と呼ばれるようになったと思われま

す。唐津焼の名称が記されたもっとも古い史料は、古田織部重然の『織部茶会記』です。慶長7年（1602）の項に唐津焼の水指の記述が見られます。

唐津焼の始まりは、1580年代に岸岳（唐津市北波多）の窯で、生産が開始されたことによるのが定説となっています。朝鮮半島からの技術導入と考えられますが、1592年から1598年の豊臣秀吉による文禄・慶長の役以前ということになります。岸岳系の窯として、飯洞甕下窯跡、飯洞甕上窯跡、帆柱窯跡、皿屋窯跡、皿屋上窯跡、追納屋窯跡などの窯が知られています。飯洞甕窯では、彫唐津茶碗や、叩き壺、帆柱窯や皿屋窯では藁灰釉の皿や瓶類が作られています。初期の伝世品では天正19年（1591）に自刃した千利休が所持していた奥高麗茶碗「ねのこもち」や、壱岐の聖母宮に伝わる天正20年（1592）銘の四耳壺などがあります。このころ唐津港からこれらの焼き物が積み出され、消費地で徐々に唐津焼の名が定着して行ったと考えられます。

■窯場の変遷

唐津の領地を当時支配していた、波多三河守親が、文禄3年（1594）に豊臣秀吉から処罰され、代わりに寺沢志摩守広高が領主となり唐津藩が創始されました。岸岳系の窯場はこれを契機として終息し、窯場は南部へ移動します。1590年代から1610年代、唐津藩の窯跡は、現在の行政区では伊万里市に所属していますが、江戸期は唐津藩領でした。ここでは絵唐津の皿や碗、水指などがつくられました。こうした茶陶類の趣味的な陶器の他に、甕や特利、播鉢などの雑器類も同じ窯で生産されています。絵唐津が生産された期間は、1590年代から1610年代にかけての約30年間です。この僅かな機関で古唐津の評価が確立されたといえます。1620年代以降の唐津焼の急激な衰退は、有田における磁器生産の台頭が原因と考えられます。

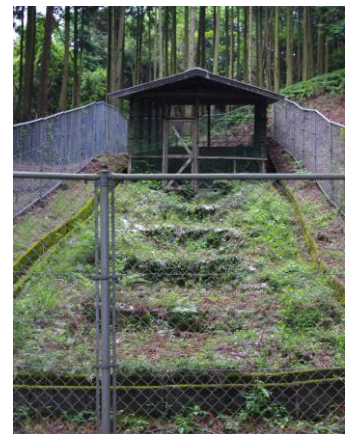
■近代以降の唐津焼

明治の廃藩置県以来、中里家のみが唐津焼の生産を維持しました。明治期から大正期において、唐津地区の陶業はかつて無いほど衰微した状況でした。今日では唐津市内の窯元は約50軒をを数え、江戸初期のような活況を呈しています。



唐津焼

（唐津市フォトライブラリーより）



北波多稗田にある飯洞甕下窯跡

（『唐津探訪』より）

◎引用・参考文献（出典）

- ◆唐津焼 NHK『美の壺』2008
- ◆佐賀県史近世編1968
- ◆唐津焼の研究 中里逢庵 2004
- ◆唐津焼夢図鑑 唐津焼協同組合1998
- ◆炎が結ぶもの
- ◆東アジア文化交流新興 1996
- ◆唐津焼の源流 県立名護屋城博物館1996
- ◆波多三河寺と唐津城 小山善弘1981

◎もっと詳しく知りたい方は

唐津市近代図書館へ
お問い合わせください。

■電話：0955-72-3467

■ホームページ：
http://tosyokan.karatsu-city.jp/hp/cnts_lib/index.html